

「あなたもアブラハムの子なのだから」

それからイエスはエリコに入り、町の中を歩いておられた。するとそこに、ザアカイという名の人があった。彼は取税人のかしらで、金持ちであった。するとそこに、ザアカイという名の人があった。彼は取税人のかしらで、金持ちであった。彼はイエスがどんな方かを見ようとしたが、背が低かったので、群衆のために見ることができなかった。それで、先の方に走って行き、イエスを見ようとして、いちじく桑の木に登った。イエスがそこを通り過ぎようとしておられたからであった。イエスはその場所に来ると、上を見上げて彼に言われた。「ザアカイ、急いで降りて来なさい。わたしは今日、あなたの家に泊まることにしているから。」ザアカイは急いで降りて来て、喜んでイエスを迎えた。人々はみな、これを見て、「あの人は罪人のところに行って客となった」と文句を言った。しかし、ザアカイは立ち上がり、主に言った。「主よ、ご覧ください。私は財産の半分を貧しい人たちに施します。だれかから脅し取った物があれば、四倍にして返します。」イエスは彼に言われた。「今日、救いがこの家に来ました。この人もアブラハムの子なのですから。人の子は、失われた者を捜して救うために来たのです。」ルカ福音書 19章 1～10節

ザアカイの人物像

まずは、ザアカイの人物像からです。彼は取税人のかしら、金持ち、背が低いと記されています。取税人とは、ローマ帝国の手先となって、同胞から税金を取り立て、しかもそこに上乗せして私腹を肥やすことから、ユダヤ人からは売国奴として激しく嫌われていました。取税人は罪人と呼ばれ、神の民から除外され、異邦人と同じ扱いを受けていました。

取税人になるということは、確実に金持ちになれる、しかし皆から嫌われ、社会から疎外されるということです。その覚悟をもって取税人になるのです。そこまでしてお金を求める心理とは、どのようなものでしょうか。

現代においても、似たような事があります。闇金の高利貸、違法薬物売るヤクザ、高齢者から大切な老後の貯えを奪うオレオレ詐欺師…そんな違法行為を行う者たちはもちろんのこと、法律をかいくぐって、社会的弱者からお金を搾取し、人をだまし、私腹を肥やすなどという事はたくさんあります。

職業を名乗ることが出来ない、人から後ろ指を刺されるような者になる。それでもお金持ちになりたいと思わせる心とは、一体何でしょうか？ このような人々は、お金持ちになることで、一体何をしたいのでしょうか。

この人々は、お金では手に入らないものを求めているのです。だから、無理をしても必要以上にお金を求めることになるのです。お金では手に入らないものを手に入れるためにお金を求める、この矛盾のスパイラルに陥ってしまう時、人はお金の奴隷とされてしまうので

す。

しかも取税人は、神の救いから除外されるのですから、その道を選ぶことは「神を捨てる」という選択なのです。その取税人の、しかも頭であるザアカイは、真の神を捨てて、お金を偶像とした者たちの代表なのです。

イエスを見るザアカイ、ザアカイを見るイエス

そんなザアカイが、イエスを見ようとしたのです。木の上に登るくらいですから、何か特別な思いがあってイエスを見ようとしたのだと思います。それは、ただ好奇心が強かったからなのか、それとも救いを求めていたのか...、それは分かりません。しかし、大切なのは、イエスを見ようとしたことなのです。

イエスに救いを求めている人も、イエスに敵対心を持っている人も、イエスにただの好奇心を持っている人も、イエスを見ようとするときに、イエスに出会うのです。

キリスト教の撲滅論を書くために徹底的に聖書からイエスを調べた人が、その作業の途中で回心し完成した書物が『ベン・ハー』であったという、ルー・ウォレスの話は有名です。

ある精神科医は、聖書を調べてイエスの心理分析を試みたそうです。その結果、彼はイエスを信じてクリスチャンになりました。

どんな動機でも、イエスを見ようするなら、救い主イエスに出会うことになるのです。なぜならイエスは、確かに救い主だからです。

そして今度は、イエスがザアカイを見られたのです。イエスは、このザアカイをどのように見たのでしょうか？

「イエスは、ちょうどそこに来られて、上を見上げて彼に言われた。」(5節 a)

イエスは取税人を見ているのではなく、ザアカイを見ているのです。イエスの目に映っているのは、ザアカイその人なのです。そしてその人は、神に選ばれ、神の祝福にあずかるべきアブラハムの子なのです。「この人もアブラハムの子なのですから。」(9)

イエスの目に映っているザアカイは、取税人のザアカイではなく、アブラハムの子としてのザアカイなのです。確かにザアカイは、自らの意志でその身分を捨てたはずですが、しかし、神の召しと契約は変わらないのです。ザアカイが神を捨てても、神はザアカイを捨ててはいないのです。

私たちは、自分を見るときでも、他者を見るときでも、主が見ておられるように見たいものです。罪と汚れによって覆われてしまっても、傷つき損なわれていても、否定され埋もれていても、その奥の奥にある、決してなくなる事実は—それはその人も神のかたちに造られ、イエスが十字架で命を捨てるほどに愛している人であり、イエスを通してアブラハムの祝福にあずかることの出来る者であること—を見ることが出来る者になりたいものです。

矛盾のスパイラルからの解放

「ザアカイ、急いで降りて来なさい。わたしは今日、あなたの家に泊まることにしている

から。』ザアカイは急いで降りて来て、喜んでイエスを迎えた。」(5節b、6節)

なぜイエスは、急がせたのでしょうか？ 危ないから気を付けてゆっくり降りて来なさいとは言わないのです。

この「急いで」は、喜びから湧き上がったことばです。イエスの抑えきれない喜びを感じます。「人の子は、失われた者を捜して救うために来たのです。」(10)と言われたように、まさに失われた一匹の羊を発見したのです。隣近所を集めてパーティを開きたいくらいに、イエスは「大きな喜び」に包まれているのです(ルカ15:7)。ゆっくりなどしてられないのです。イエスの方から走り寄って行きたいほどです。それほどの喜びなのです。

ザアカイは、自分の名前が呼ばれたとき、一瞬ドキッとしたと思います。なぜ自分の名前を知っているのか？ 誰かから聞いたとすれば、自分のことを良く言う人などこの街にいるはずがない。この後に、叱責のことばが語られてもおかしくないはずですが、それなのに「きょうは、あなたの家に泊まることにしているから。」と言われたのです。

このたった一言が、ザアカイをまったく変えました。彼が、お金では手にはいらないものを手に入れるためにお金を求める、という矛盾のスパイラルから脱出した瞬間です。

脱出の鍵は、イエスのことばです。それは愛です。ザアカイが悔い改める前に、償いをする前に、本来の自分の姿を取り戻す前に、まず先に受け入れたのです。まず先に愛したのです。このイエスの愛が、ザアカイをお金の奴隷状態から脱出させたのです。

イエスのことばは、ザアカイの心の琴線に触れました。お金では手に入らないものはお金ではなく、恵みによって与えられるものなのです。そして今、ザアカイは、その恵みを受け取ったのです。彼が本当に求めていたものは、やはり愛だったのです。それが手に入った以上、必要以上のお金は要らなくなったのです。

「しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。」(ローマ5:8)

そして今度は、ザアカイが大喜びで急いで木から降りてきました。イエスがザアカイを見つけた喜びと、イエスに見つけられたザアカイの喜びが結び合わさり、大きな喜びとなったのです。

救いが来た！

当然、イエスのこの言動に対して、ユダヤ人は理解できません。

「あの人は罪人のところに行って客となった。」(7節) この批判は、ザアカイを取税人として見ていない人にとっては当然のことでしょう。しかし、この批判も、イエスの喜びとザアカイの喜びの前にかき消されていくようです。

大きな喜びに満たされたザアカイは、このように言います。

「しかし、ザアカイは立ち上がり、主に言った。『主よ、ご覧ください。私は財産の半分を貧しい人たちに施します。だれかから脅し取った物があれば、四倍にして返します。』」(8節)

律法によれば、盗んだ金品の賠償は2倍であると書かれています(出エジプト22:7)。

しかし、ザアカイは4倍と言いました。しかもザアカイは財産の半分を貧しい人に施すというのです。これは自発的な行為です。

彼がここまでしたのは、喜びに満たされたからです。律法の規定以上の賠償をするのも、それに加えて財産を施すことも、すべて喜びから生じたことです。それは素晴らしいことです。しかし同時に、この償いだけでは、償いきれないことがあります。それは、ザアカイが自らの意志で、神の民であることを放棄したこと、つまり神を捨てたことです。

この罪に関しては、どれだけの金品を積んでも償いきれるものではありません。まさに犠牲の命が必要です。賠償金を4倍にしても、10倍、100倍にしても償いきれない罪のために、イエスご自身がその命を犠牲にしてくださったのです。

お金のことはお金で償うことが出来るかもしれませんが、しかし、命は命によってでしか償うことはできないのです。

「イエスは彼に言われた。『今日、救いがこの家に来ました。この人もアブラハムの子なので。』」(9、10節)

「救いが来た」ということは、つまりザアカイのこの償いという行いが救いではないということ。ザアカイの行いが救いにまで到達させたわけではありません。救い主イエスが来たのです。

ここにも、イエスの十字架の救いが予表されています。命の償いのために、神の御子が、神の御姿を捨てて来てくださったのです。私たちが行ったのではないのです。

このメッセージを書いているのは、待降節=アドベントの最中です。アドベントとは、ラテン語のアドベントゥースという言葉から来ていて、その意味は「到来」です。救いとは、私たちが「行く」ものではなく、向こうから「来る」ものなのです。

まさに、「救いが来た」のです。

私たちもアブラハムの子

聖書には、「ですから、信仰による人々こそアブラハムの子孫だと知りなさい。」(ガラテヤ3：7)と記されています。イエスを信じた私たちもまたアブラハムの子なのです。

主は、今も本来の私たちを見てくださいます。時に、神のかたちが損なわれ、埋もれ、否定されるようなことがあるかもしれませんが、それは自分の罪から生じたことなのか、あるいは社会の罪がそうしたのか、いずれにしても私たちは、この現代社会にあって、本来の神のかたちに造られた自分の姿を見失うことがあります。

しかしイエスは、どんなことがあっても、あなたをあなたとして見ています。もちろん主は、私たちのことばも行いも見ています。しかし、そのもっと奥にある本来のあなたを見ているのです。

本来のあなたの姿は、天地の造られる前からキリストにあって愛の内に選ばれていたあなたです。神のかたちに造られたあなたです。ましてやイエスを信じて、アブラハムの子として、その祝福にあずかる者になったあなたです。(ガラテヤ3：13, 14)

主の十字架の愛が注がれるとき、私たちは本来の自分を取り戻すのです。そして一匹の失われた羊を見出した天の喜びと、見出された私たちの喜びが結び合わされる時、その喜びはより大きな喜びとなるのです。